
エディプス

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エディプス

【Nコード】

N8778H

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

己の罪を償う為その目を潰し放浪の旅に入ったエディプス。彼がアテネに来た時に女神が姿を現わし。ギリシア神話のエディプスのお話です。罪と償いのお話です。

第一章

エディプス

「これでいい」

彼がこう言ってまずしたことは。

己の指をその両目に突き刺した。忽ち濁った血が飛び出る。

「なっ、王よ」

「何故この様な」

「私には何かを見る資格はない」

驚く周りの者達に対して告げた。最早彼の目からは血がとめどなく流れるばかりであった。

エディプスは今己の両目を潰した。そのうえで周りの者達にまた告げた。

「先の王ライオスを殺したのは私だ」

「ですがそれは」

「止むを得なくでは」

「だが私が殺した」

このことをあえて告げるのだった。

「そして私は母であるイオカステを妻としてしまった」

「それもまた」

「仕方ないことでは」

「仕方なくはない」

エディプスは周りの者達の声を打ち消した。

「私が罪を犯したことは事実だ。その私がどうして冥府に旅立った時に死んだ父と母の顔を見ればいいのか」

そのライオスとイオカステのことである。

「だからこそ私はこの目を潰したのだ。そして」

「そして？」

「このテーパーを去る」

自らが王であるこのティーバイを去るというのだ。

「罪を犯した私には王である資格はないからだ」

「そんな、王よ」

「それは」

「ならぬ。罪人は罰せられなければならない」

エディプスは周りの者達の言葉を退けるのだった。

「だからだ。私は去ろう」

こう告げてティーバイを後にするのだった。だがその彼について来た二人の少女がいた。

「御父様」

「せめて私達が」

「その声は」

目が見えなくなったエディプスは耳で判断した。その声の主は。

「アンティゴネ、それにイスメーネか」

「はい」

「私達です」

それぞれ赤い髪と黒い髪の娘達だった。どちらも整い優しい顔をしている。

「目が見えなくてどうして歩けましょう」

「ですから私達が御父様の目になります」

「ならぬ」

だがエディプスは娘達のその申し出を断ろうとした。

「それはならぬ」

「何故ですか？」

「それは」

「私は償えぬ罪を犯した」

己のことをまず娘達に告げたのだった。

「その私の傍にいてはならん」

「いえ、それでもです」

「御父様は私達の御父様です。ですから」

娘達も引かない。強い声であくまで言っただった。

「何があつても離れません」

「御父様を御護りします」

「この私をか」

エディプスはこの時わかったのだった。二人の自分への愛の深さとその慈しみの心が。それを感じてはそれ以上はとも言えなかった。

「そうか」

「宜しいですね」

「それで」

「うむ」

二人の言葉にこくりと頷いた。

「済まない」

「それでは。参りましょう」

「何処にでも」

こうしてエディプスは娘達に護られながら放浪の旅に出た。己の罪深い姿をできるだけ人に見せないように山や荒野を進む。そうして気の遠くなる程長い間彷徨ったのだった。

やがて彼はアテナイに辿り着いた。できるだけ山の中を彷徨い人を避けていたのだがその中でアテナイの傍にある山に着いてしまったのだ。

「ここはアテナイだな」

「ええ」

「そのようです」

娘達は耳を済ませる父に対して答えた。辺りには小鳥の鳴き声や川のせせらぎが聞こえている。その音を聞きながらの言葉だった。

第二章

「けれどよくおわかりになりましたね」

「どうしてですか？」

「聞こえるのだ」

彼は言うのだった。目は見えていないが何かを前に見ている顔になっ

ていた。

「声が」

「声がといいますと」

「それは一体」

「アテナイの声だ」

聞こえるというのである。

「聞こえる。あれはテーセウスの声か」

「テーセウスといいますと」

「あのアテナイの王の」

「そうだ。あのテーセウスだ」

エディプスはまた娘達に告げた。

「彼の声が聞こえる」

「では御父様、ここは」

「そうです」

それを聞いた娘達はあらためて父に告げるのだった。

「立ち去りましょう」

「そして山の奥へ」

「うむ」

エディプスもまた娘達の言葉に頷いた。山は緑に覆われ森の木々が爽やかな風に揺れている。その奥に川がありせせらいでいる。小鳥達は木の枝に止まって心地よく鳴いている。

ここはまだそうだった。しかし奥は鬱蒼としている。そこに入ろうというのだ。

「それでは」

「こちらに」

父をそれぞれ左右から手を取って山の奥に入ろうとする。しかしここで。若い、しかも凜とした美しい女の声が彼等の耳に入ってきたのだった。

「待つのです」

「待つ！？」

「待てという」と

「エディプス」

今度は彼を呼ぶ声がした。

「エディプス。行つてはなりません」

「この声は一体」

「これは」

娘達はその声を聞いて顔をあげた。そのうえで周囲を見回すのだった。

「どなたですか？」

「妖精ではないようすし」

「私です」

言いながら二人の傍に一人の鎧兜に身を包み槍と盾を持つ美女が出て来た。

巻いた豊かなブロンドである。そして青く澄んだ水の如き目だ。

凜とした美貌を持っており娘達はその彼女の姿を見てわかったのだった。

「アテナ様」

「アテナイの守り神の」

「そうです。私です」

アテナはここで名乗ったのだった。

「エディプス、待つのです」

「アテナ様が何故私を」

目のないその顔をアテナに顔を向けて問うエディプスだった。

「呼び止められるのですか」

「貴方はここに留まるのです」

こう彼に告げるのだった。

「ここに。宜しいですね」

「それは何故ですか？」

エディプスはアテナの言葉を受けて怪訝な声を返した。

「何故。ここに留まれと」

「救われる為です」

これがアテナの言葉だった。

「だからです。ここに留まるのです」

「救われる。馬鹿な」

エディプスはその言葉に顔を背けた。

「私が救われるなどと」

「今からここにテーセウスが来ます」

アテナは再びその彼に告げた。

「それはもう感じていますね」

「はい」

アテナの言葉に今度は素直に頷いた。

「あれだけ強い気配は他にありません」

「テーセウスは心を知る者」

伊達に英雄でありアテナイの王ではないということだった。テーセウスという男はそうした意味で真の英雄であると言っていい男なのだ。

「必ず貴方を迎え入れることでしょう」

「私にはそれが耐えられないのです」

だがエディプスはこう女神に返した。

第三章

「それが。迎え入れられることがです」

「貴方のその罪故ですね」

「そうです」

そうなのだった。まさにその通りだった。その罪故に彼は今彷徨っているのだから。

「ですから。私はこのままもう」

「罪は清められるものです」

アテナはその彼に対してまた告げた。

「必ず。清められるものです」

「必ずですか」

「そうです」

アテナはまた告げてきた。

「必ずです。そう、貴方の目もまた」

「私の目もですか」

「罪を償う為に自ら潰したその目も」

アテナの声はいとおしげなものになっていた。エディプスに対する慈しみ故だろうか。その声で彼に対して告げてきたのだった。

「元に戻る時が来ています」

「何故ですか？」

ここでエディプスは思わず女神に問うた。

「何故私に。そんな」

「救いをですか」

「救いは必ずもたらされるものです」

「救いは」

「そうです」

また語るアテナだった。

「罪は償われ救いが与えられる時が来たのです」

「ですが私には」

「エディプスよ」

女神の言葉は続く。

「今からアテネに行くのです」

「そのテーセウスの下にですか」

「そこに貴方を救ってくれる者がいます」

「私をですか」

「貴方はそこで目を癒され」

アテナはさらに言う。

「そしてその罪も清められるのです」

「アテネに行けば」

「御父様は」

女神の言葉は娘達の心も打った。それを聞いて今父に顔を向けて告げた。

「御父様、是非」

「参りましょう」

「御前達もそう言うのか」

エディプスは娘達の声も聞いた。

「私にアテネに行けと」

「はい、是非です」

「参りましょう」

彼女達の言葉はまさにその通りのものだった。

「それが私達の願いです」

「アテナ様と同じく」

「そうか」

娘達の声を受けて。彼は考える顔になった。目はなくともそこにあるものは深い思慮だった。

「それでは私は」

「アテネにですね」

「私達が案内致します」

再びそれぞれ父に告げた。

「ではアテナ様」

「参ります」

「エディプスを頼みましたよ」

アテナは娘達に対しても優しい声をかけたのだった。

「ではアテナで」

「はい、それでは」

「あの街で」

こうしてエディプスは娘達に連れられてアテネに向かうことになった。アテネへの道はこれまでの山道とは違い平坦な道だった。その道を歩みながら話すのだった。

「私の罪が許されるなどと」

「御父様は充分償われました」

「アテナ様も仰っていたではありませんか」

娘達はここでも父に対して告げていた。

「ですから参りましょう」

「あの街へ」

「そうだな」

何度も言われてだった。彼も遂に頷いたのだった。

第四章

「行こう。私を救ってくれるその者の前に」

「はい、参りましょう」

「是非」

こうして彼等は先に進むのだった。やがて高い石の城壁に囲まれた立派な街が見えてきた。その美しい街こそがアテネであった。

彼等はアテネに入るとすぐにテーセウスの前に案内された。テーセウスは逞しい身体に引き締まり整った顔をしている美男子だった。背は高く威風堂々としていた。

その彼はエディプスを見てまず、にこりと笑って述べたのだった。
「よく来られました」

「はい」

エディプスは彼は見えなかったがそれでも顔を向けて応えた。

「はじめまして」

「貴方のお話は聞いています」

テーセウスは娘達に左右から守られている彼に対して告げた。

「本当によくぞここに」

「私は」

「そして貴方は運がいい」

今度は微笑んで述べたテーセウスだった。

「まことに」

「運がいいとは」

「今アスクレピオスがアテネに来ていまして」

「アスクレピオスという」と

「やはり御存知でしたか」

エディプスの今の言葉からそれを察したテーセウスだった。

「貴殿も」

「はい。名前だけは」

エディプスはこうテーセウスに返した。

「聞いたことがあります。何でも治せないものはないとか」

「そうです。死者さえも蘇らせてしまいます」

それ程までだというのである。

「あの者なら貴方の目も治せましょう」

「そうですか」

「ではアテナ様の仰ったことは」

「やはり」

ここで娘達はわかったのだった。

「御父様は救われる」

「アスクレピオス様の御力で」

「すぐに呼びましょう」

テーセウスの決断と行動は早かった。

「そしてすぐに貴方の目を」

「有り難き御言葉」

エディプスはテーセウスの言葉を聞きながら言った。今は目はなく涙を流せなくとも。それでも声で感激の涙を流して言うのだった。

「まことに。何と言っていていいか」

「何、私が行うのではありません」

しかしテーセウスはエディプスのその言葉に笑って返した。

「ですからまずは彼を呼んできますので」

「はい」

間も無くしてそのアスクレピオスが連れられてきた。極めて穏やかで優しい顔立ちをしている。髭は濃くそれが彼を知的に見せていた。その彼が来たのだった。

「それではアスクレピオスよ」

「はい」

テーセウスの言葉に応えて顔を向けていた。

「エディプス殿の目だが」

「お任せ下さい」

穏やかな声で返すのだった。

「すぐになおしてしまえます」

「では頼むぞ」

「わかりました」

こうして彼はすぐにある薬草と水のようなものを取り出してきた。

そうしてそれをエディプスの目に当てそのうえで塗った。すると忽ちのうちにだった。

「そんな……」

「それだけで」

娘達は今自分達が見ているものが信じられなかった。

「御父様の目が元に戻った……」

「これがアスクレピオス様の」

「この葉と霊薬を使えばです」

アスクレピオスは娘達に対してもその穏やかな声で告げた。

「どの様な傷もたちどころに癒してしまうのです」

「そうだったのですか」

「それで」

「エディプス殿」

アスクレピオスは今度はエディプスに対して声をかけた。既にその葉は取っている。

「如何でしょうか」

「何と……」

彼はまずは驚きの声をあげた。

「見える。嘘のようだ」

「嘘ではありません」

アスクレピオスはこうエディプスに告げた。

「これは」

「この目は潰した筈なのに」

「例え潰れていようとでもです」

彼はエディプスにさらに告げる。

第五章

「私にはなおせるのです」

「この目もまた」

「そしてです」

今度はテーセウスが彼に告げてきたのだった。

「償いきれない罪もあります」

「貴方はまさか私のことを」

「知っています」

穏やかな微笑みでエディプスに告げるのだった。

「あのことは」

「そうでしたか」

「だからこそ貴方にこの者を会わせたのです」

そのアスクレピオスに顔を向けての言葉であった。

「それでなのです」

「そうだったのですか」

「貴方の目はなりました」

あらためてのこのことを告げるテーセウスだった。

「そしてその罪も償われました」

「罪もまた」

「貴方が自らを罰する為に潰したその目はなりました」

「はい」

「それが何よりの証です。ですから」

彼はさらに言った。

「貴方はもう彷徨う必要はないのです」

「彷徨うこともですか」

「ここに留まって下さい」

彼は言った。

「このアテネに」

「アテネにですか」

「罪は償われたのです」

このことをまた言うのはエディプス自身の心にこのことを知らしめる為であろうか。

「ですからこのアテネに」

「私をこの街に」

「如何でしょうか」

さらに勧めてきたのだった。

「貴方さえ宜しければ」

「御前達は」

エディプスはここで娘達に顔を向けて問うた。

「御前達はどう思うか」

「私もテーセウス様と同じです」

「私もです」

娘達の言葉はこうであった。

「ですからどうか」

「このアテネに」

「そうか」

エディプスは娘達の言葉を受けて遂に頷いたのだった。そして。

「それでは私はこのまま」

「既に屋敷を用意してあります」

テーセウスはまた彼に告げた。

「ですから」

「有り難うございます。それでは」

「はい。このアテネへ」

こうしてエディプスはアテネに迎え入れられた。娘達も一緒である。彼女達はそれぞれ夫を貰い女としての幸せを得た。エディプスは屋敷で静かで幸福な生活に入ることになった。その中で屋敷に毎日来る娘達に対して話すのだった。

「罪は償えるのか」

「はい」

「その通りだと思います」

娘達もまた父の言葉に答える。再びその目が見えるようになったエディプスは今は遠くを見ながらそのうえで娘達に話していた。

「だからこそ御父様の目も再び」

「アテナ様の御言葉通りに」

「償えない罪だと思っていた」

エディプスはさらに言うのだった。

「私の罪は。だが」

「御父様は救われました」

「だからこそ今」

「己では償えないと思っても」

娘達の言葉を聞きながら呟く。

「そうではないのだな。決して」

「その通りだと思います」

「今の御父様が何よりの証です」

「そうだな」

今度は娘達のその言葉に対して頷いたのだった。

「私の罪は償えた」

「はい」

「そうして今。魂の平穏を得ることができた」

言いながら遠くを見続けていた。そこにはそれまで彼が彷徨ってきた荒野がある。しかしその荒野は今は見える。見えるその荒野は決して美しくはなかった。だが見えるというこのこと自体に深い喜びを感じその中で見続けているのだった。その元に戻って目で。

エディプス 完

2
0
0
9
.
8
.
2
8

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8778h/>

エディプス

2010年10月8日15時33分発行